若者

オーストラリア雑感

魚崎浩平*

オーストラリアはカンガルーやコアラの国として日本には知られており，また最近では砂糖交渉や牛肉輸入の問題で資源供給国としての面がクローズアップされている．しかしアメリカやヨーロッパに比べると国の内容や人々の生活がよく伝えられているとは言い難い．

そのオーストラリアへ，しかも厳しい事で有名な Bockris 教授（電気化学）の許への留学の話が出た時には驚いたが，またとない機会と喜んで行く事にした．

1974年4月春一番の吹き荒れる日本を離れ，満月の空を一飛びでオーストラリアに渡った．留学先はシドニー，メルボルン，ブリスベンに次ぐオーストラリア第4の都市である南オーストラリア州の首都アデレード（人口80万人）の郊外にあり，創立後10年という新しいフリンダース大学の大学院である．敷地162万m^2にわずか3,000人足らずの学生（大学院を含む）がいるだけという実に恵まれた環境にある．

オーストラリアは面積が日本の20倍もあるのに人口は逆に日本の約10分の1（1,300万人）しかなく，大学も国立大学が首都キャンベラに1つと州立大学が17程あるだけで私立大学はない．修了年限は専攻によって異なるが一般に3年で学士号がとれ，さらに1年の過程を終わるとオナーズと呼ばれる．つまり理学士（オナーズ）あるいは文学士（オナーズ）という事になる．このオナーズで成績の良い者に大学院に進む資格が与えられ，理科系の場合平均3年半位で博士号が取得できる．従って理科系では修士号をとる学生は非常に少ない．オーストラリアでは大学個別の入学試験はなく大学以外の色々な高等教育機関を含めて共通試験（Matriculation）の成績に応じて大学に入れるかどうかが決まる．大学（他の高等教育機関を含めて）は授業料が無料の上に，学生には国から全員に返済無用の奨学金が出ることなどから，親のスネかじりという例は余りなく夏休みなどにはアルバイトで生活費を稼いでいる学生が多い．

オーストラリアの大学にはアジアからの留学生が非常に多く，フリンダース大学でも3,000人足らずの学生のうち70人以上がアジアからの留学生である．9月の末十五夜の頃にはアジアからの留学生が中心となってムーンケーキ・フエスティバルが開かれ，各国の民族舞踊，歌，楽器演奏などに触れながら各国のお国自慢料理を味わうことができる．9月末はオーストラリアでは春の初めで中秋の名月という感じとは違うのであるが，アジアと一言でいっても風習が大いに違うことを認識することのできる非常に楽しい集まりであった．

アデレードは静岡を赤道に対して折り返した位置にあり温暖な気候の住みやすい町であった．冬の最低気温は＋5°C程度で雪も氷もない．また夏には時に40°Cを越えることがあったが，それも年に1度か2度で，大体は30°C以下の乾燥したしのぎやすいものであった．ただ夏には雨は殆んど降らないので丘や牧場の草は枯れ山火事が頻発する．日本とは逆に冬になると雨が降り緑が戻るのである．冬でも丘一面に黄色や紫色の花が咲き庭の花が途切れる時はない．

アデレードの町はシティーと呼ばれる1マイル四方のビジネス街を公園が取り囲み，その外側は住宅地であるが各家の庭は広く街路樹や公園もたくさんあるので色々な鳥を見ることができる．日本では動物園でないと見られない様な赤や緑などのきれいな色をした鳥が裏庭に平気でやってくるのにはびっくりしたものである．

*魚崎浩平（Kohei UOSAKI），三菱油化株式会社，応用研究所，Ph. D.（フリンダース大学）；昭和46年阪大・工・（応化）・修士課程修了，応用化学

また海の美しさは人口80万人の都市のそれとは思えないもので，油など全く浮んでおらず，つり，サーフィンそして海水浴を楽しむことができる．

シドニーには3,000人もの日本人ビジネスマンとその家族が居るとの事であるが，アデレードには学生，ハイスクールの日本語の先生など数十人程度しか日本人はいない．到着した時フリンダース大学唯一の日本人学生であった毛利さん（北大(工)助手）には飛行場に出迎えていただいて以来実にお世話になった．アデレードの中心には100年の歴史を誇りX線干渉で有名なブラッグ父子ゆかりのアデレード大学があり，そこに偶然兄（阪大(工)講師）が同じ時期に2年間滞在したのはお互いに心強いものであった．

先に述べた様にオーストラリアの人口密度は日本の200分の1位で，しかも6大都市に人口の半分以上が集まっていることから，内陸部には殆んど人が住んでおらず，きれいな緑が見られるのは人が住み牧場や公園になっている所だけであり，ブッシュと呼ばれる内陸部の方に入ると赤茶けた土地に，ユーカリその他のわずかな木々がみられるだけである．

アデレードの中心から車で15分も走れば羊や牛がのんびりと草を食んでいる牧場が点在している．道路はすいており郊外では100kmの速度で走っていても，どんどん他の車に追い越される．中には1時間も真すぐな道が続きロボットでも運転できるのではないかと思える様な所があった．さらに郊外へ出てアデレードから400km，車で半日も走ればカンガルーやエミュ（駝鳥に似た鳥）が道を歩いているのに出くわす．またアデレードの南西150kmにあるカンガルー島では野生のペリカン，アザラシ，そして沢山のカンガルーを見る事ができる．

オーストラリアの広さを最も痛感したのは，パース（西オーストラリア州の首都）からインディアン・パシフィックと呼ばれる鉄道に乗った時である．これはインド洋に面するパースから太平洋に面するシドニーを結ぶ3,500km以上以上の鉄道路であるが，その中で西オーストラリア，南オーストラリア州境付近のヌラボー（木がないという意味）平原はまさにその名の通り荒漠たる地域であり，500kmカーブがないという世界最長の記録を持っている．パースを夜出た汽車は金鉱の町として知られるカルグーリに朝着き，その日のうちに州境付近に着くのであるがその間700km以上にわたって景色には全く何の変化もなかった．発車してから38時間後に南オーストラリア州ポートオウガスタを過ぎたあたりで牧場の緑を見た時は実にほっとした．

このように広い土地で非常に少ない人しか住んでいないために消費者市場は小さく，多くの工業製品は輸入に頼っており，自動車，TVといった国産されている物も日本を中心とする輸入品に押されがちである．その為失業率は高く10%近くにまでなっている．しかも羊毛，牛肉を中心とする農産品，鉄鉱石，ボーキサイト，石炭を中心とする鉱物資源の輸出が世界的不況の影響で不調であり，経済的に不安定な状態が続いている．オーストラリアの通貨であるオーストラリア・ドルは1974年と1976年の2度にわたって各々10%以上の切り下げを実施している．また経済的不安定を反映して政治状勢も流動的であり，1972年12月に労働党が23年振りに政権を握り1974年5月に国会解散，再選されたのであるが，1975年12月の英女王の名代である連邦総督による首相解任に伴なう総選挙で再び自由・地方党連合政権が復活した．今（1977年11月現在）また解散総選挙が行なわれている様である．

滞在中に2度も選挙があったのだが，街頭演説や連呼はなく静かなもので，日本人の感覚からすればどこで選挙が行なわれているのかといった感じであった．

こういった政治的，経済的不安定さにもかかわらず，オーストラリア人は大陸的というのかのんびりとしており，TVや車の修理などでイライラしたことが多々あった．しかし一般に非常に親切であり，町の治安も良かった．これらの事は社会保障が充実していること，個人の生活水準が高いことなどに起因するものと思われる．

工業製品は輸入品が多いため高価であるが，

食料品は非常に安く，例えば甘くて水気の多い大きなオレンジが1ドル（＝当時約400円，現在約300円）で20個近くあり，ステーキ肉は1ドルで450 g位買えた．米も日本と同じ様においしい米が1ドルで2kgと日本よりはるかに安い値段であった．ちなみに日本で外米と呼ばれるパサパサした長い米の方が若干値段は高かった．ワインも日本では高級酒のイメージで最低でも1本600円位するが，ヴインティージ物でも2ドル位，安いのであれば2.2ℓ（3本分）で2ドルという安さである．アデレードの周りには多くのワイナリーがあり，なかでもバロッサバレーは有名でそこのワインは日本にも輸入されている．食物の他に重要な住宅も年収の3～5年分位で町の中心から20分の所に200坪の敷地に50坪の家を建てることができるのであるからあくせくする必要がないのである．

大きな貿易黒字をかかえ円がどんどん上り世界経済の機関車とまで言われる日本と，通貨を1974，1976年の2度にわたって大巾に切り下げたオーストラリアではあきらかに日本の方が金持ちなのだろうが，一般の人達の生活ではこれは全く逆でオーストラリアの人達の方がはるかに上であることを認めざるを得ず，なんとなく割り切れない思いがするのである．

2年半という短かい留学中のしかも研究の合い間に眺めることのできたのは広いオーストラリアのほんの一部であったにすぎないが，日本にとって今後ますます重要性を増すと思われるオーストラリアの理解にこの小文が少しでも役に立てば筆者の望外の幸せである．

最後に留学をすすめて下さった戸倉仁一郎大阪大学名誉教授及び田村英雄大阪大学教授，留学を心よく認めていただいた三菱油化株式会社そして留学中にお世話になった各位に感謝する．